

166  
204  
295

勸進比丘尼歌合全

085827-000-2

特67-737

勸進比丘尼歌合

近藤 清石 / 編

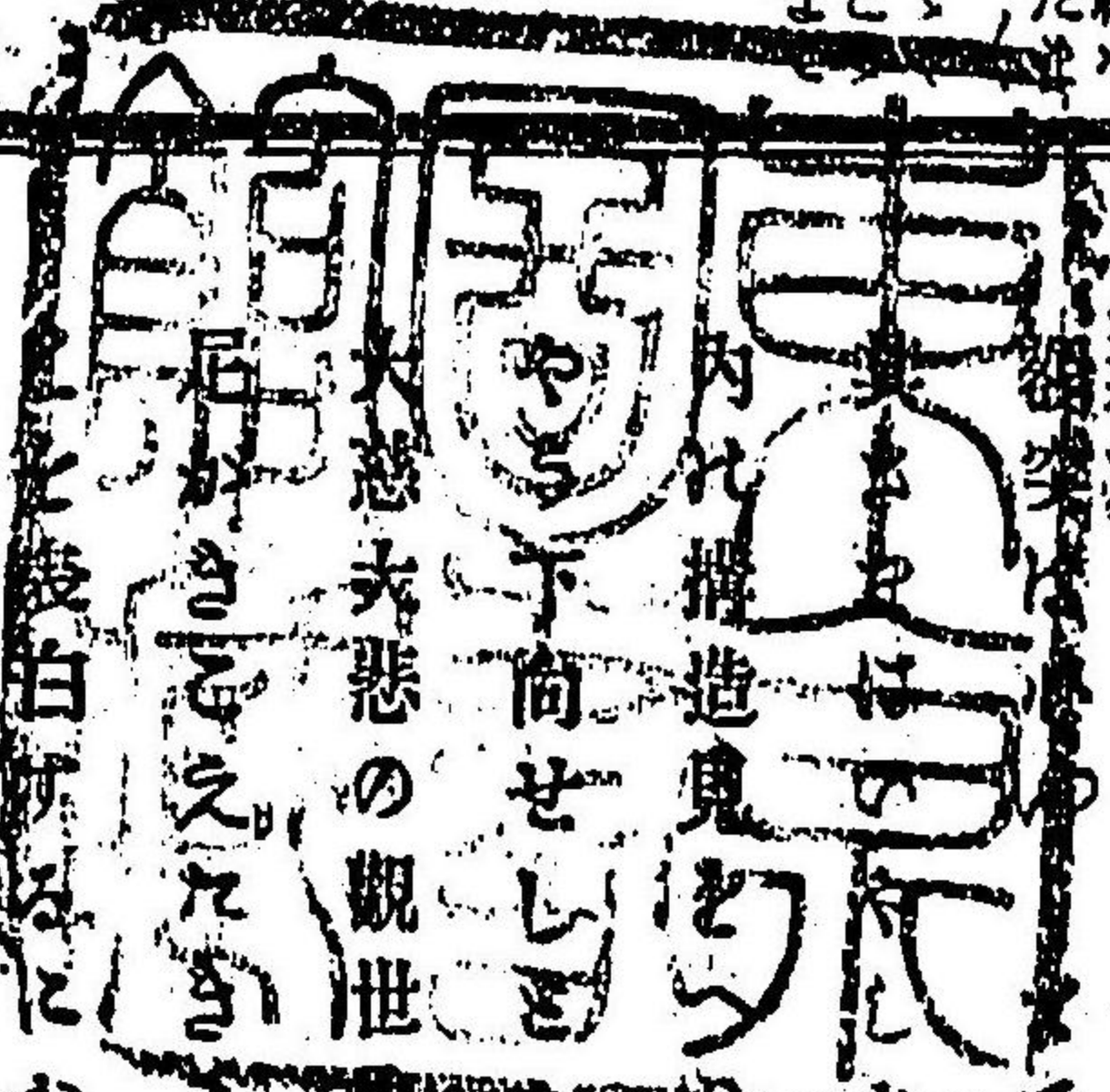
M28

DBD-0375





休源鈔神歌  
あめふれ  
のきのた  
水つふ  
といは  
るゆきま



剝たる壁繪虫ばみたる柱所に昔をしのぶ色を  
見ゆばかりなる夕禮盤のかたへお尼ありてつふ



念佛するあるべし旅やつれは著しきものうら  
らすたのれは本尊に願ふべきこともあし堂の  
れば外に出て後の方にめぐらんとする程には  
思ひけん数珠たしもむ音さらくとして南無  
大慈大悲の觀世音菩薩いのすども心のうちは知しめすべけれど  
尼がささるえたさごとこそ侍れひと見たりといふ聲すいかなるこ  
とを後白けはにかどやをら柱に身をよせて立さくに尼の都れ片  
やどりの者にておさない時にかろいろにたくれ侍りしをちかさ  
見たりにいとやむごとるさ尼君の世はなれたる所にどて住給へ  
るが便ささふとありとてぎつしどりてら言たり御あたりさら



礼内則女子  
 中略十有五  
 年而并  
 伊勢物語年  
 たふも十と  
 て四八へふ  
 けるといく  
 たひ君とた  
 のみきつら

ずたふしうてたまひぬ、やう西東する頃よりよみかきもれひぬる  
 ことなど教へたまひて、カハサシ年カハサシに、しもげいしれ子なにかしによ  
 すがさたまりぬるが、年だにも十とてとはいふまでもあく四ヨシはへぬに、  
 このめる人朝の露と消ぬるだにあるを、尾上さへ夕の烟とたちの  
 ぼりたまひしかば、世をおもひとりてさまをかへ、諸國の靈場を經  
 めぐる身とはなり侍り、さていにし年あのことには來はんべりてあ  
 り寄るほご、ある所にて山口職人七十一番歌合を見侍りしお、故尾  
 上の經うのしたまへるいとまあは、かゝるものに心よせたまへる  
 むどなと思ひいでられて、昔こひしくよみ見るまゝに、これにもれ  
 し作者のあるやうにおもはれしかば、かの勸進聖歌合にあらひて  
 三十二番をものせばやと思ひつきぬるが、後の世のこと修シユする身  
 にはかなさじさにかゝづらふことかは、と思ひうへして、忘れんと

体源鈔神歌  
 いつれの佛  
 のくわんよ  
 りも千手の  
 ちかひそと  
 のもさか  
 れたる草木  
 もたちまぢ  
 ふばなまぢ  
 みあるまぢ  
 さたれば

するに忘られそ、とすれば思ひいださるゝにつけて、つらく思ひ  
 めぐらすお、此世あすこしも恨の殘るはわろきまじなりと死し侍  
 れば、これをしもはたさすては、九品の下が下にありともと思ひを  
 かくとも、ろの詮あかるべき、あまじひにたり立て、はやくとげんこ  
 そよりらめ、とそれく、勸進し侍りしに、やまやまことなりしかば、  
 今日菩薩に死てえたいまつるにあん、あはれ狂言綺語とはいへ、あ  
 れを因縁として、あ四八の作者をも、自然期の夕は、安養淨土に生  
 れしめまへと表白して、三十二番をみる静かに披講しつ、さて  
 まゝ額ヌカつきて猶法樂にとやおもひけん、いつれの佛の願ノリよりも千  
 手の誓予願もしき、どうふひいでたり、殊勝さいはんかたあさに、聲  
 さへいと若くて、梁の塵もまひ出ぬべくおもはるゝにつけても、猶  
 まゆのあたりぢぢけぶるらんかしと、いとゆかしければ、格子のす



花間よりさしのぞがんとするに、いっははくなん、なげしにつまづ  
たてはたと倒れぬ、このもの音に、尼やおさるたぬらん、どかしらも  
たがて見れば、ありし堂の椽にはあらで、わが霜隄居の南の窓の机  
にかゝりて、かの職人歌合を見ると、いつの程に、いねむりに客  
ん、ろの夢のた、ちなるが、頬杖つた損じて、さめたるなりたり、ひた  
ひのあたりのいたさは、さることながら、さける歌わすれぬまふと、  
かきゝるすに、ひときただに忘れず、あやしのことや、さめぬとおも  
ふも、猶夢に、ころとうたが、ひつゝあるをりしも、後の方に、聲して、例  
の華胥國の遊のと思ひたるに、さはあらざりけり、なにのさがぞも、  
このよき天氣風に、やあらん、雨にやあらん、花の爲あたらおとなり  
といへば、かへりとするに、矢郷島田うちつれて、來るありけり、か  
んの件のこと、ひとわらひひて、これなんその歌なるとさし出す

に、二人かしらさし合せて、見て、心に、くき尼の茶、などりの歌合の例  
とおひて、判せざり、若ん、女のさしすぐいふりと、佛に、さげしまれん  
どのようないほかな、と、島田がいふに、矢郷がいへらく、よし、あし、こと  
いはんよりも、君さちは、町長とむつまじさな、かなり、町長あたのみ  
て、かの七十一番の判者を、今日の辨説上人に、せよ、といふに、心に、そ  
れも、れもしろ、かるべしとて、たのみ、たこにて、判詞を、くはへ、勸進比  
丘尼歌合と名づけたる、歌合左の如し、

近藤清石

題 花 述懐

作者

左

弓術者

劍術者

右

礼式者

柔術者



碁打	花賣
矢賣	芋賣
箕作	蓮堀人
杜氏	濱子
産女	日雇
焼繼	らんぶ商
樽拾	牛乳搾取
とり買女	女髪結
古綿打	奉公人口入
元結製造	かもし捻
こむ僧	猿廻し
券番	反古賣

芥拾 紙屑拾  
 醫者 産婆  
 判者 観進聖代作  
 花

一番 左 弓術者  
 上さしのひと筋にころめてらるるの根にもほるはなさくら花  
 右 礼式者

さらさらとうけとりわさし手ききすは櫻のはなはちりやすき花  
 左歌弓術は神代の昔よりのてふりにて、中昔あは武士を弓取と  
 稱ふ銃砲の術ひらけてより、其用すたれたれを、近ころ古式を存  
 し、且運動によしとて、心をよする人多くなりて、歌合の一番にす



とめり、其根は矢鏃にて矢尻なるが、尻といふことを嫌へるにや  
あふん、ふるくより根をぞいふある、一首の姿雄しくて、巻頭の  
歌さるにはちき、右もさることふとら歌合の一番の左は、勝  
の字ねほむねさだまれるやうなるが上に、この左の歌は殊によ  
ろしくれもはれ侍れば、たがた勝を申すべし、

二番

左

剣術者

この七日すぶりやめまし太刀風に庭のさくらのちりもころすれ

右

柔術者

さく花にころれあらは春風のあたるをさくらのわさをまへてん  
左花の命一周間なせば、その間りうくとなる太刀風をいとひ  
てその業をやむ、さることぞかし右齋齋には楊心專當の二流な

あしが、この作者は專當流の先生と思はる、われもこれも花をれ  
もふ心まさりれとりなかるべし、

三番

左

碁打

はつるごもなくて見ばやとおもふ花けちさす如く風にちるなり

右

花賣

野に山にわれもましんこのころはやとに花さす人はまれなり  
左果る期にはつる碁をかぬ、ちちは闕にて、今はだめとすいふな  
る、げあ櫻の花の風にふりれて散るさま、ためさすが如くさうど  
きたる、かの伊豫介の女のみ、ちこそすれ、空蟬の君してまらた  
まへやとこらいはせまをしけれ、右せんうたなしに野と山に交  
る、いりでか左に及ばん、まきたるべし、



四番

左

矢賣

若子いほふほかにさくらのつやみくふぞう鳥をいゝる矢をめせや人

右

芋賣

花さかりよし野の春をしのふ人いも山も見てかへれとそれもふ  
左矢ぞりは歳末の商ひにて、花の題には難義なるを、櫻の苔くふ  
うそ鳥を射る矢をといふ、案すれば案せらるゝものありけり、げ  
にぞそ鳥の花の苔をくふ鳥なり、ひとせ判者が家の庭櫻苔な  
りしやぞ、うそ鳥の來てあろべる、うつくしき鳥なれば、いつも來  
よりしと思へるを、人のこは花にあだをる鳥ありとていたく驚  
かしければ、來ずなりぬ、さて花の開たるを見せば、まなかたはな  
るのまならせ、えひらるぬがねやかりき、右歌山名の妹に芋をろ

へ、踏れに買カをろへたり、こまも花の題には難義なるをよくとり  
ましより持たるべし、

五番

左

笑作

笑つくりは花やいとはんやつの風つかさどるてふ星の名あれば  
右 蓮堀り

うき葉でぬ水にうつりてはす池のつゝみのさくら花さきにけり  
左八つの風主とてふとよまれたるは、晋書天文志に、笑四星、後  
宮妃后之府、亦曰天津、一曰天雞、主八風、とあるに據られたるなる  
べし、ものしり人の歌は、骨くしくあることなり、右こともなくす  
らくとよまくだしたり、このかたやまざり侍らむ、

六番



左

とうぢ

はなさきぬむらかみし酒うはれもて宮野にやゆく小鯖にやゆく

右

濱子

汲てやしかまけはまやそくみくみて浪の花たに見るいとまなし

左歌宮野小鯖はどもに吉敷郡の村名にて、宮野に式内仁壁神社の糸櫻あり、小鯖に、八幡宮の馬場の並樹の櫻あり、山口人の花見はこの兩所なり、されは作者かくよまれたるなり、右よく聞えたり、同じ位のきたなるべし、

七番

左

番女

かづきいつるあはひきり玉匂ふまていと山さくら花さきに客り

右

日雇

花を見つ肩いたきまぐになひ來し酒もわりごもつきにあるまで

右月に尽をそへたり、左いひふりさるやうなれど、けし記ありてしらべよくいとめでたし、右はよしめき樽破子にもせよ、また荷ひかへるはくるしかるべし、艘しら玉を船につみて、どが夫に櫓ねさせつゝ見るいと山櫻にこそ心ひかるれ、

八番

左

焼繼

さくら見るいとまなき身はせめてもとやきつきすあり花形の杯

右

らんぶ商

とりあつめ吹かへさせん春風のくたくさくららのらんぶありせば  
左花形の杯は、延喜民部式に長門國盜器の中に、花形鹽杯十口徑各三寸と見ゆ、職にいとまなくて、杯の名にさくさむ情あはれる



り、されどくだけを焼繼たる繼目見ゆるやうなり、右に及びがた  
かるべし、さて序にいふべし、がらす製造は、近き世よりのことの  
やうふ人もふゆれをまからず、南都の勅符倉に原質のふき殘  
あり、されば既に一千年前ふ製造の術ありしよといちじるし、

九番

左

樽拾

あき樽をひろひひろひて花を見んゑひをすゝめよはるのやま風

右

牛乳搾取

宮野村にうしの乳をのむ人ありて仁壁のさくらゆたきに見る

左 新古今集寂蓮法師の不酤酒戒花のもとに露のあさはは  
あらざるひなすゝめと春の山風、のうたを離棄してよまをたり、  
いとれもしろくめでだし、右逸興なし、いかでか左に及はん無輪

負たるべし、

十番

左

取賣

花そめの名になくさみてさくらさく春をふる衣とりうりの身は

右

女髪結

花見髪ゆぬ暮とさもうけあひて夜さくらをたに見るひまもあし

左右れなじはどのうたなるべし、

十一番

左

古綿打

うちふるとたにうの香ものまらんを花見衣はあはせありけり

右

奉公人口入

きさらきにくちいれすみて山口のこゝろしつかに花う見らるゝ



右奉公人のいでかはり、山口は男女ども陰曆の二月二日、裁は、女  
は二月二日、男は三月五日なれば、うくよまれしなり、これはいと  
まありて心静に花を見て樂しまるゝあれど、一首の心詞左に及  
ばずやあらん、左はいさゝか題にうとまといへど更に花に縁な  
死職なれば恕して勝と申すべし、

十二番

左

元結製造

よりかくる元結くるまたもきけりひよきに花のちらんと思へは

右

うもし捨

あくまでもかさまの花の香にしまん身をいかもしに捨つけあは  
左職をもたむむ花を思ふ情深さによりての事とはいへど、右の  
いひかなへたるに、及びかたるべし、勝の字右にあさへ侍らん、

十三番

左

こも僧

いにへはいたいく笠のあき目よりなうめし花を打つけあして

右

猿まはし

櫻さく庭あまさをまはしてんれもひの附かのはあも見るやと  
左勸進聖歌合の繪にて見れば、笠なし、いつ比より笠うぶるな  
はしとはなりけん、御一新前までいふも僧の顔は晦日の月と同  
様にて見し人あかりしが、面隠するると禁歌にならたれば、今は  
げに打つけあり、右思ひの外の花は、纏頭をいふも、字力あり、左よ  
りはいひまはしもまさとや申べからん

十四番

左

券番



ものいはぬ花にふゝろろあくかるゝものいふ花の招たるゝ日

右

反古買

この比はさくらかさねの毬と袋反古かおの目につれて見えけり  
左解語の花の花の宴に招かるゝにつれて其花に心のあくがる  
ゝとよまれたるあるべけれどいさゝかいひたらぬこゝちし侍  
り右花をれもふによりて得ぐかごに入れたる櫻重ねの書翰袋  
の目につきて見ゆるなりよくよまれたりどや申べからん方今  
うさね文袋流行にて色さまゞあれど柳重ね櫻重ねれ得し柳  
かさねは表白裏青櫻がさねはれもて白すら赤花なり左のくゞ  
くだしだよりも右めにつきて見え侍り

十四番

左

芥拾

はるなれやとりあつめつゝ畑中にすつるあくゝも花の香るする

右

紙屑拾

木のもとにすたはいあいのうき捨のかみもちりほふ櫻なれこと

左ことの外よく侍り右いかでか及ばん負たるべし

十六番

左

醫者

さく花れいのちをのばすくすりなし人のやまひは春にかへせど

右

産婆

初まうてする見いふきてうふする社のさくらけぬも見てり

左回春のわざにたけたまとも花の命は風なくとも一七日これ

を延さんみどげに薬なかるべし右産土社に初詣山口は男兒は

三十三日の日女兒は三十二日の日萩の男兒は百十日の日女兒



は百二十日の日に詣るならはしなり、かく日数はまちくあれ  
せ、すべて百日參と唱ふ、この言たけふもとよまれたる伊弉諾尊  
の御誓いちしるしくなん、この番、右は産土社にはつ詣、左は人の  
病を春にかへす、いづきもめてたきとなり、かちまたなかるへし、

述懐

十七番

左

弓術者

ひいふつと射る目鏑はひいけとも世に聞えなき身をいかにせん

右

禮式者

ふたつあき三體一統いたづらにしとのすみかにならんとすらん

左、ひいふつは、平家物語扇的の條に、與一鏑を取てつがひ、よつ引

てびやぎと放つ、小兵といふぢやぎ十二束三伏、弓は強し、鏑は備  
ひいく程長鳴して、あやまたず扇の要ぎは一寸ばかりわいて、ひ  
いふつと射切たる、鏑は海へ入けをば、扇は空を揚りたる、とあ  
るこれあり、ひいは鏑の目に風の入りてなる聲、ふつは物たきる  
と音なり、作者頗る手ぶるなるべけれど、與一が如きはれど、さ  
いであはねば、其名世にきよえざるあるべし、右三體一統は應永  
年中礼式の古寶を識したる書あり、其かたの寶典なり、さる寶典  
も世のさまうつりかはりて、蠶魚のすゝりとならんとするを歎  
れたる、實にさることなり、この言た三一の數字あるを以て上に  
二字をいたし、下の蠶魚のし字に四をるゑたるとればし、それ  
これもよき述懐のうたと聞えたり、持ふるべし、

十八番



左

劍術者

試合してたゞ死うためしゝゝひきもやせほそり行老ろかなしき

右

柔術者

すべぞなきやはらの手をも出されぬたひめの鬼の掴まゝるは  
いにしへの蜀の先主は、脾に肉の生したるを見て、老のまさい  
たらんとするをかなしみ、この先生は、腕の肉の消しゆくを見て、  
既に老ぬるをなげく、功業をたてんとを思ふの丈夫の心事、古今  
同一轍といふべし、右はらぬてき寄けばまけさること論なかる  
べし、

十九番

左

碁打

打石は白とをきともすぎわひをねもへはむねに手ころれかるれ

右

花賣

年たらしりのあしたより花うれと何とるむ春にあはぬ身ううき  
山口の碁の師は、いと細死烟あるべし、手をれく今は先をすとい  
ぬにや、抑ひりしは上手を黒をはとりしやうある、いつの比より  
かへさまにはなりにけん、花うり人のすた、大陽曆ああらざらん  
昔にては聞えぬすたあれど、今の世となりては、いひあへたる  
ことあり、胸に手をれくよりもと思ひたまふるは、ひがことなり  
や

二十番

左

矢賣

弓もついかゝしはかりとなれる世はきて矢原れ名をは墮さす

右

芋賣



京師本杉原  
本鎌倉本半  
井木の羽を  
鳥羽の羽を  
羽は十藤は  
きに巻たり

あるは焼き或は蒸しても買れぬ夜はいもやすうらぬ嘆をりする  
左げに歳の暮におびたやしもはたてあきなるり、羽は鎮西八  
郎爲朝の保元の戦にかき食たりし矢のやうにて、鷲鼻鶏の羽も  
嫌はずさまくなり、矢原の名をばおとさすとは實事也、右寐も  
安からぬに、芋安からぬをそふ、逸興ありでおもしろし、さはいへ  
名をおとさぬはほむべきことおれば、持と申へからん、

二十一番

左

箕作

縁もやれ庭もたどみて簸る糠もあはらすあれる身をなげくかな

右

遊堀り

弱腰をとる鉄よりもまげに曲てかゝみゆゝするはさるくるしき  
左身に箕をりふ、いひかなへる歌にていとおもしろし、右この

山口などにてころ遣はる鉄はまがりたれ、萩などはすぐなるも  
のなれば、おしまるせてはいひがたかるべし、左尤もて勝たるべ  
し、

二十二番

左

とうち

思ふまゝに酒のうちはつくれとも我身に花はさかぬなりけり

右

濱子

あてならぬ名と悪みけん殿にくし我からくしてつくれるものを  
左とうちのみ糶をつくることなふばころあらめと七十一番は  
作者に列れる専門の糶屋やまりうごたむ、右定家卿の伊勢物語  
の勘物に、或説云、搦尻壺搦といふもの也、其尻似此山、此物語之習、  
好卑詞、寂蓮殊信用、此説先人命、縦雖爲搦事、凡卑也、不可用之云、



とあるをとりきたるなり、據あり勝たるべし、

二十三番

左

蟹女

とたつ海のそこにあさりて九門の穴のかひなき身をなけくかな

右

日備

とれと我ゆひもゆけぬを苦しかるどさしも身をははまれざる甕

左九穴は貝は石決明なり、本草に九孔螺、殻名千里光と見ゆ、右雁の訓ゆひ也、結ふこれをそへたり、これもかれもよかめれど、強て勝負を定めんとなく、蟹女の述懐はよみがたからざるべし、備人の述懐はいひおほすこと難義なりとおもはる、ざるによく職分の述懐をいひおほせられても侍るかな勝れりと申べし、

二十四番

左

焼繼

や死ゆげはまたつかはるゝ皿見ても世に捨らるゝ我ろくましき

右

らんぶ商

とか心くたけあちなりかけがらす吹うへしたるらんぶならぬをくだけがちなるらんぶよりも焼繼の皿やまさりたらん

二十五番

左

樽拾

今こそあれあきたる樽をひろひてもとか世空しく過しはてめや

右

牛乳搾取

とか國のむかしにありしそのとさをひとの國より後にはたへさ  
左おしあべて丁年にたらぬ人のしとさあるが花のうたの手ぎ  
はわりてあはうたに我世ひなしく過しはてめや、といはきたる



ゆく／＼身を立て名をあげらるゝ人なるへし、右三の句其業に  
蘇の業をとふ、蘇は我國にて昔し唱へし牛乳の名にて、延喜民部  
式諸國貢蘇番次に、其取得乳者肥牛日六八合、瘦牛減半、作蘇之法、  
乳大一斗煎得蘇大一升、但飼秣者頭日別四把と見ゆ、いつ比よ  
このわざ絶しか知られず、今は西洋の法を傳へたる也、それをこ  
とわれる歌にて捨がたき歌なり、なすらへて持と申すべし、

二十五番

左

とり賣

ゆふつゝの光見るまで取うりにかゆきあゝゆき身はつかれつゝ

右

女髪結

人の髪たきみたきつゝあせりてもしりへしとさにはまそく身を愛  
左おんはらひものはなごやといひてゆきよきはらひものいで

さりとてゆきあるはとりかへを頼まれと、あちこちとありくげ  
にからだゆりゝなるべし、さて夕川はかゆきあゝゆくの枕  
詞なるをむらちて、昴星を寶現にはかはれたるは、よくよまれた  
りと申すべし、右たぎは髪を揚るをいぬ、万葉集に、たげはぬれた  
がねはながき妹か髪といへる是なり、一首全く土佐日記二月五  
日の件に、風吹てふか巻もふふと老りへし死にむきて、は  
とく／＼むくうちにはめはべし、といへる文をとりてよまれたり、花  
に勝負あかりしがこの番も猶持たるべし、

二十七番

左

古綿打

綿のごとうちかへさるゝよしもかなおひかまされるかのが肌も

右

奉公人口入



口ありてい何の日かせに成ぬへたよとみによとむ宿のみ何しめ  
左肌はよしうちかへたる綿の如く、柔肌あぢちかへさるゝこと  
ありども、あかぐろくきたなき色になれるはせんかたなりるべ  
し、右よとみに、せむといへと、みの宿の主人の口入おろかある  
やうに聞ゆるなれど、さにあらず、口入よしと田舎よりこの宿に  
よりつとへるなるべし、瀬に錢セニをそゑ、みづしめに水をそへたり、  
伊勢の御ミの、あすか川ふちにはあらぬわか家もせにかはりゆく  
ものにもありける、のうたよりおもひよられさるあらん、おもし  
ろくもよまれさるかな、勝るべし、

二十八番

左

元結製造

力なれどもひありと萩にいとひきよりもなく人にかふなり

右

かもし捻

ふようなる友たちなりと色あかくなれるかづらや我を見るらん  
元結は小郡邸にて専ら製造す、萩人の諺に小郡元結よききれま  
すといふ、ふは萩元結江戸元結に比して舊藩の比にいへるなり、  
切れては、元結のせんあければかふ人もあるまじき、今に専ら  
製造すれば他の郡邸あはひきよりもなくうるゝなるべし、右は  
枕の草紙昔お不へてふようなる物、七尺のかゆらの赤くあり  
たる、とあるおよりてよまれたるべし、初句音あれと左の切れや  
すきか、しからざるかは知られぬと、力なき歌なれば、これに敵し  
たふくや侍らん、

二十九番

左

こも僧



このうへもあきかくれかど笛竹あよをしのひける人もありしを

右

猿まはし

まめあらぬ朝三暮四のあさむきを思ひまはせばわか身あさまし

左御一新前は諸藩の士弟あやまちあれば亡命して普化寺に入りて其弟子となりて世を思ふるかくすれば藩にもさのみ探索して逃捕もせざりしをよまれたるなり右初句眞實に豆をそへ、結句のあさましに猿をそへ、四の句猿ひきの縁語、二の句は列子に宋有狙公者、愛狙、先誑之曰、與若茅朝三暮四、足乎、衆狙皆怒、俄而曰、與若茅朝四而暮三、足乎、衆狙皆伏而喜、と見わたる故事にて陳腐なりといへども、巧によまれたりといふべし、この句がひ笛竹の音よまも、さるひきのゆなにごそこころひかれ侍れ、

三十番

左

券番

むかいのちましかくあるをよそにしてさ、線香の立をもる身や

右

反古買

されたれの唐紙洋紙にあらねども世にあまひもあき我身うあ

左よくこそみゝるゆれたれ、右唐紙洋紙の屑す死がへしにもあらず、實に反古籠中のすたりものなり、これもよくとりあしてよまれたりと申すべし、持といたすべし、

三十一番

左

芥拾

いにしへは鳥これをもまゆる身の今はあくたの山ゆくるなり

右

紙屑拾

あなおもあひしりの御代に生れいて、道に落たる紙ひろふとは



左三四の句をもて見れば、昔は歴ありしこといちしるし、さる  
からにこの道にも心をやよせられたりけん花のうたいとよく、  
またこのうたもあしからず、さてさる歴もかゝるわざに細き  
烟をたゆることゝなる、世は定めなきもの哉と歎息せらるゝは  
や、右鑑札を携帯して猶道に落ちたるを拾ふを慙づ、實に職業は  
いやしといへども聖代の民たるにはぢす、持たるべくや、

三十二番

左

醫者

ふたりのなき人の命をうけもちて身を立るわさをくすしかりける

右

産婆

ゆはた帯またあをひえを取わけばよきみきにこそ常に酔ふかれ  
左くすしは奇字醫字をよむ、このうたみの二をうぬ、二つなき人

の命をうけ持て身を立るとよまるるなれば、この治療をうくる  
人、病氣平愈うたがひあかるべし、右ゆはた帯は妊婦の着帯あて  
懐孕五箇月にゆふ予例ある、されど足利直義卿の室着帯七箇月  
なりしこと園大曆も見たり、あをひえは神代巻に見ゆて竹刀  
をよめり、出生兒の臍の緒をつぐに用う、その竹刀をとりて職名  
あひひかけて、好酒好キ酒に常に酔ふとよまをたる、めでたき巻軸の  
がひにこそ侍れ、もちたるべし、

明治二十七年三月



25-92

明治廿七年十二月廿六日印刷  
同 廿八年一月六日發行



編輯人

近藤清石

山口縣吉敷郡山口町大字  
八幡馬場町第十番屋敷

發行人

宮川臣吉

山口縣吉敷郡山口町大字  
中市町第六番屋敷

印刷所

協同印刷株式會社

山口縣吉敷郡山口町大字  
道場門前町第李三番屋敷